

女 帯

円地文子

角川書店

昭和 37 年 5 月 30 日 初版発行

著作者 文子 ち 子 円地文子

発行者 角川源義

印刷所 中光印刷株式会社

女
帯

三
八
〇
円

製本所 株式会社鈴木製本所

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見町 2-7

振替口座 東京 195208 番

落丁・乱丁本はお取替えます

目次

8

目 次

雪見酒	一五七
風の尾	一六八
神楽舞	一七七
沖の鷗	一八三
改名	一九二
樂屋銀杏	二〇七
花見の巻	二二二
お汲の行方	二三九
花の雨	二四九
磯なげき	二六〇
卵の花くたし	二七二
初鰹	二八二
泡沫	二八九
女帯のあとに	三〇四

雪	見	酒	一五七
風	の	尾	一六八
神	楽	舞	一七七
沖	の	鷗	一八三
改		名	一九二
樂	屋	銀	二〇七
杏			
花	見	の	二二二
卷			
お	汲	の	二三九
行			
方			
花	の	雨	二四九
磯	な	げ	二六〇
き			
卵	の	花	二七二
く			
た			
し			
初			二八二
鰩			
泡			二八九
沫			
女	帯	の	三〇四
あ			
と			
に			

女 帶

女
帶

雪の下の花

お汲は叔母の幾野のうしろについて、蓮華寺の石段を登って行った。自然石の急な石段の上に古い山門があって、その傍に銀杏の太木が鮮かな緑に鳥形の若葉を飾っていた。

信州飯田の道具屋の娘に生れたお汲は高遠藩勘定方の侍である母方の叔父、岡部四郎五郎の家へつい二カ月ほど前から厄介になっている。お汲の母が早く死んで継母に弟妹が多いので、何かにつけてお汲の冷たく扱われるのを哀れがった四郎五郎夫婦の計らいだったが、同じ山国といっても能楽や茶事、踊など遊芸ことの盛んな飯田の町住いから、高遠の小さな武家の家に来てみると、十七歳のお汲には暮らしのつましさ以上に窮屈で氣のつまること多いのである。

今日は叔母が墓参の供に連れて行くというので、お汲は久しぶりに組屋敷の外へ出られるのがうれしくて、いそいそ従いて来た。

「おやどなたかご参詣があるとお見える」

幾野は山門を潜ったところで立ちどまってお汲の方をみた。日蓮宗の寺なので、七面堂が門のすぐ近くにあつて、木連れ格子に願掛けに切ったらしい女の髪がいくつつか結び下げたあ

る。五月雨どきのうす曇った空の下に黒い髪の下っている堂の様子若いお汲には何となく陰気に氣味悪く感じられたが、叔母の指さす方を見ると広い境内の奥の本堂の近くに駕籠が一挺降りていて、中間が二人その近くの石に腰を降ろしていた。本堂の縁にも侍らしい男が供待ちしているのが見えた。駕籠は飾りのない質素なものだが、付き人のあるのは身分のある人の参詣であろうとお汲は思った。

「ちょっとあの中間衆にきいて来るからね。お前はここに待つておいで」

と言って、幾野は一人で本堂の方へ歩いて行ったが、やがて駕籠近くに立ったまま、小手招きして、お汲を呼んだ。

「大丈夫ですか。お詣りしても叱られませんか」

とお汲がいうのに、幾野は仔細ないという風にうなずいて見せてから、草履をぬぎ捨てて、厚い茅葺屋根の本堂へ上って行った。

二人は御本尊の前に額ずいて、賽銭を上げた。幾野は南無妙法蓮華經と熱心に唱えて手首にかけた数珠を押しもんではおがんでいる。お汲も叔母の真似をしてお題目を唱えてみたが、幾野のように熱心にはなれないので形ばかり殊勝げにうつむいていると、

「お供の衆、絵島どのがお帰りなされるぞ」

と老いた声で呼ぶのが聞えた。

供待ちしていた侍が立ち上って、本堂を降りて行く様子で

ある。

「方丈さまがおいでになる」

と言つて幾野は居住いを直した。日成和尚は香染めの法衣を着た無難な歩き方で客座敷の方から、客を案内して出て来た。七十を越えているはずだが、筋骨の逞しい古武士のよ
うな風格の老僧である。

「これからは雨の多い季節ゆえ別して身体に気をつけられるがよろしい……」

と和尚は客に話している。上司の武家かと思つたのに、客は意外に女であつた。お汲の眼にはまだ四十になつたかならないぐらいの年にみえたが、眉も払つていず、着ているものも色の分らないほど地味であつた。

「毎年、これからの季節には足にむくみが来まして、難改いたします。当地に参りまして以来の身体癖でございます」

女の声は低いが澄んでよく通つた。背から腰のあたりの攪み方に何となく老年が感じられるが、細面の華奢な輪郭に、切れ長の眼の涼しく冴えて見えるのが、お汲にはいつぞや飯田の芝居で見た江戸役者の何とやらしい美しい女形の舞台顔にそっくり似て見えた。

「星逢いのころまでは参詣もなり兼ねますゆえ、いつぞや写させて頂きました提婆達多品を朝夕誦すのを日課にいたします」

「いやいや、お氣が向いたらいつでもお出かけなされ。又、

盤の上で戦いましうぞ」

和尚の枯れた大声の笑いに女客は微笑んでから、丁寧に会釈して、階段を降りて行つた。その歩み方も静かな中にきりと引きしまつて美しかった。

和尚は本堂の縁に立つたまま見送っている。殿さまの御親類や御家老の奥さまなどにしては衣類が貧しすぎるし、お住持が下まで降りて行かないのもおかしい。一体どういふ身分の人なのだろうとお汲は老婦人に対して好奇心をわかせた。

「絵島さまは基をなされますか」

日成和尚と挨拶したあとで、幾野がたずねた。

「女にしてはなかなか強い……わしはいつも二目置いて、まだ敗けが込むのじゃ」

と和尚は笑いながら言つた。

「絵島さまというのはどういうお方です」

お汲は慕参りをすませて、寺の石段を降りながら、叔母にきいてみたが、幾野はお汲の問いかげがきこえないように銀杏の梢を見上げて、

「大きな樹だろう。四五百年は経っているよ」

と言つた。

その晩食事の膳にすわっている時、四郎五郎は飯茶碗をお汲にさし出しながら、

「今日は叔母さんの慕参りの供をしたそうだな」と言つた。

「はい」

「蓮華寺はいいお寺だろう。摂津の富田とくだからお国替えになつたのはもう三十年近い前だが、御先祖の墓を見捨てるのが、何より辛かった……しかしこへ来てみたら、うちの御宗旨の日蓮宗の寺が思ひの外近くにあってやれやれと思つたものだよ」

四郎五郎は川魚の乾した煮つけをかたそうに噛みながら、話している。内藤藩の国替えで海の近い関西からこの山国へ移つて来て、生きのよい海水魚の味に恋人のようにあくがれて暮らした若い日のことが何となく心に浮うんで来た。

「方丈さまにもお目にかかりました。もう大分だいぶなお年でしょくに、いつもお元氣な方ですね」

「そう、もう八十に近いお年だろうな。仏法の修業で鍛えた身体というものは武芸の達人と同じことで年とっても軟やわにはならぬものだ。相変らず、大きい声で何かいって居られたか」

「それからあの、絵島さまというお方が御参詣でございました」

お汲は叔母の説明してくれないあの由緒よしよありげな老女に好奇心を惹かれていたのできいてみた。

「そうか、絵島どのが……また御上人ごおにんと碁を打っていられたかな」

四郎五郎は幾野の方へきいた。

「そうのようでございました。絵島さまは方丈さまより、碁がお強いそうでございますね」

「そうだろうよ。碁ばかりではない。法華經の御講釈など聴聞しても、難所を問とひ詰める問とひに男子も及ばぬ鋭さがある。深く学問したというでもないに珍しい才女じゃと、いつかお上人が話していられたことがある……」

「絵島さまというのは一体どういう身分の方でございます」とお汲はきいた。

「絵島どのか……ああ、お汲はまだ高遠へ来て間もないから、知らないだろうなあ」

幾野は夫がつまらぬことを若い娘のお汲にきかせはしまいかと、額に薄く皺しわをよせていたが、四郎五郎はこだわっている様子もない。

「絵島どのは昔、千代田城の大奥に勤めて、大年寄という重いお役を持っていた奥女中だよ。お前にはわかるまいが、大年寄というと、大奥に千人からいる総女中の取締りをする束ね役で、お高たかは六百石だが、格式は十萬石以上のお大名というところだ」

「そんな偉い方がどうして、こんな山奥へ来ていらつしやるのでございます」

とお汲はきいた。

四郎五郎は幾野と眼を見合わせてから静かに言った。

「それは絵島さまが罪になるようなことをしたからだ。本来

なら、死罪か遠い島へ流されるはずが、多年の御奉公の功に免じてこの殿さまに長のお預けということになった……恰度お国替えでここへ移って来た年のことだ。先々殿さまがお亡くなりになる……絵島どのの受取りに行く、家中一統、てんやわんやに騒動したものだ。もう三十年近い昔になるなあ」

「そうだったそうですね。私はその次の年に飯田から嫁いで来ましたから、その話はお姑さまからうかがっただけですけれども……」

幾野も夫の言葉に誘い出されて、いつか昔を偲ぶ眼さしになっていた。

「お預けのはじめのころは城下に置いてもないという厳しいお触れで、ここから一里ばかり離れた非持村の火打平というところに囲い屋敷をつくってそこに置いたのだが、何ぶん辺鄙な土地で、番の役人衆や女中どもも迷惑するので、六七年経ってから捌め手御門から五町ばかり向うの花畑へ移したのだ」

「非持村で、絵島さまが病氣された時に、診察に出張した本道（内科医）の佐久間玄石どのはあつちで雪に降りこめられてお城下へ帰れなくなつて、困つたといつか話しておいでした」

幾野は食器を片づけながら、言つた。罪のある人で流しもの同然だというのに、屋敷を作つたり、女中や役人をつけた

り、身分の高い人というのは随分他人に迷惑をかけるのだとお汲は思つた。それにしても、その絵島殿という人は一体どういふ罪で山流しになったのだらう。ここへ流されて来たのが三十年近い前だというし、その前江戸の大奥で重い役を勤めていたといへば、先刻蓮華寺で見た絵島の年はお六十近くに違ひない。

そう思つて見れば、老女らしい弱りが何となく足腰の動きに見えていたようにも思えるが、顔色の白さも髪の色さも、眼の前で茶碗や箸を片よせている四十代の幾野とは較べにならないほど若く、美しく眺められた。

「一体絵島さまはどんな悪いことをなさつたのでしょうか。身分の高い女の人が死罪にもなりかねないような罪を犯すなんて、どんなことなのかしら……私には見当もつきませんわ」
「そんなことはお汲のような年のものはまだ知らない方がいいんだよ」

と幾野はたしなめるように言つたが、四郎五郎は何げなく笑つた。

「そういつまで子供扱いにされてはお汲も不服だな。そら、煩がふくらんで来たじゃないか」

「でも、あなた」

「別に隠し立てすることもあるまいて……もう三十年も昔の話だ。絵島どの、正月、芝の増上寺へ月光院さまの御代参に與女中大勢を連れて出かけた帰りに、木挽町の山村座とい

う芝居を見物に行ったのだ」

「まあ、お芝居を……」

とお汲は眼を見張って言った。飯田にいた時分、城下のお祭りの時、江戸役者の一行が旅まわりして来たのを唯一度見たことがあったが、お汲はその中の一人の若衆方の役者をこの世ではじめて見た美しい男として心に宿していた。

「お城女中の芝居見物はお上の御法度になっているのに、華しい風俗の女中衆が大勢、棧敷に居並んだので、座方でも気にして前に簾をかけ渡した。それでも何となく普通の人が見物しているのとは違う様子が御簾の外に洩れるので、見物も舞台をみる間々に、棧敷の方へばかり眼をやっていた。ところが悪いことは出来ないもので、絵島どのの前の蝶子が転んだのから酒がこぼれて、下棧敷にいた薩摩藩の侍夫婦の髻や衣類に、酒がかかったのだ。気の早い薩州ものことではひどく立腹して、絵島どのに詫言ひとせよ……絵島どのの強情にわびぬので、居合わせた御徒目付の岡本という御人が薩州の武家に謝ってその場はすませたが、その後薩州から届け出があつて、御禁制を破つて芝居見物し、よからぬものとなつたといふので、絵島どの以下大勢が罪に落ちることになったのだ」

「まあ、そのくらいのことでは、三十年もこんな山国に流されるのですか。大奥のお勤めなんて、恐ろしいのですわね」
お汲は小さな肩をすくめ怖そうに言った。四郎五郎はにや

りと笑つて、

「ところがな、お汲……大人の世界の話には裏というものがある。絵島どのの話にも裏があるのだ」

と言つた。

旧暦の五月と言っても、高遠の氣候ではようやく桜が散つて、山吹が咲きかかるころである。夏でも夜は冷えて布団を重ねたくなる土地であるから、三人が食事をすませて、幾野とお汲は夜なべの針仕事に行燈の下にかがみこみ、四郎五郎が川釣りの棹の手入れをはじめるところには、油じみた勝手の障子に山おろしの風が松の枯葉を吹きつける音が淋しく聞えて、袷の衿もとがうすら寒く感じられた。

「叔父さま、絵島さまの芝居見物には裏があるとおっしゃつたのはどういふことですか」

硬々糊のきいた紺緋の袖を身ごろに縫いつけながら、お汲は四郎五郎にきいた。

「うん、それはつまりな。絵島さまが御法度を破つて、芝居見物をした、いや役者を買つたといふのは、そりや満更嘘でもなかったらうが、そんなことだけで大年寄ほどの重いお役の奥女中が罪になることはないのだ。そういう罪の名目をこしらえたのは上べのことでは、実はその当時の御老中方が大奥の勢力が強くて、手のつけられないのを、どこかでびしりと押えつけようと機を狙っていた。つまりは網を張っていたのに絵島どのが芝居見物でまんまと引っかけってしまったよう

なものだよ。いくら才女と言っても女は女で、男のように真の味方というものがないから、男が大勢かかって考えた網には安々ひつかかるのだ。女賢しゅうして牛を売り損なうとはこのことかも知れない。しかしさすがは絵島どのも、大年寄ほどの人だけあって、召し捕られて調べられた時にも芝居見物のことは認めたが、役者といかがわしいことがあったとか、或いは御主人の月光院さまに御迷惑のかかるようなことは何一つ白状せなんだという……それに当地へ配流になってからの行状をみても、まことに行儀正しく何一つ非の打ちどころはない。それゆえ代々の殿さまも殊の外感心遊ばされて、今では罪人とは言うものの、厳しい掟など立てては居られぬのだ」

「それだからこそ、ああして折々は供をつれて、御仏参にも行かれるのだよ。人のうわさには絵島どのの月光院さまのお身持ちを恥^{はづ}けて、罪に墜ちた忠義ものだともいうほどなのだよ」

と幾野は教えるように言った。俳優との恋愛で罪に問われた女として絵島を見させたくない念が、高遠藩の女子教育として幾野にも伝えられている。

「絵島さま達がそんな重いお仕置きを受けるようでは芝居の人達の方にもお咎めがあったのでしょうか」

とお汲はきいた。

「あつたところではないさ」

四郎五郎は釣棹に糸をつけて、手心を試めしに振って見ながら言った。

「その時のお調べでは拷問にあって死んだ芝居者さえあったくらい、島流しやら重追放やら科人が沢山出た上に、木挽町の山村座はお取りつぶしになってしまった……絵島どのの相手をした生島新五郎という丹前役者は三宅島に流されて……死んだという噂はきかないから、多分まだ生きているんだろうなあ。歌舞伎役者が御殿女中のお座敷へ出るのが厳禁になったのも絵島どのの騒動以来だよ」

「絵島さまもお気の毒と言えはお気の毒だけれども、相手の役者は飛んだかかり合いになったものですね」

幾野は縫いものの手を上げて、針を髪の毛に潜らせながら言った。

「お上のことというのは兎角、下の方へ強く当って来るものだ」

と四郎五郎は言った。

「三十年なんて長い月日、島流しになっているなんて……ちよつと考えても恐ろしくなりますわね」

お汲は眼を見張って言った。

「この生島という役者はどんな芝居をしたのでしょうか」

「そりゃ、江戸は勿論、京大坂三ヶの津に鳴り響いた和事師の名人だったのだ。お召し捕りになった時はもう四十近かつたろうが、十七八から売り出してその年までちつとも人氣が

落ちなかつたというから大した丹前役者だよ」

「でも今では七十近いおじいさんですわね」

とお汲は何となく気のぬけた声で言った。生島が思いの外若くないのが気に入らないのである。

「今の公方さまになってから、一度大赦があつて、その時、絵島どのの一件のものは大方御赦免になったのだが、生島だけはゆるされなかつた。もつともその時絵島どのも赦免しようという話が出たのだが、身柄を引取る親類がないのでそのままになったということだ。騒動の時から十年余り経っていたが、もうその時にも御老中の女中で絵島どのの名を覚えてゐるものは一人もなかつたというものな。もともと謀反人や吉利支丹とは違つて男の世界では大したことではなかつたのだ。それだけに絵島どのも生島も悪い籤を引いたというものだ」

四郎五郎と幾野はそれからしばらく、女はよろずに謹しみ深くなくてはならない。夫を持った場合には、夫の家を自分の死にどころと決めて、どんな辛いことでも辛抱し通さなければ女の道に適つてゐるとは言えない。絵島どののような万人に優れた才女で、大奥の束ねをしたほどの人でも、ちょっとした気のゆるみから、位にも縁にも放れて、こんな山奥に閉じこめられて一生を埋れて過すのが、よいためしだとお汲に教訓するように話した。

お汲ははい、はいとうなずいてきいていたが、床に入つてから一人で今日蓮華寺で見かけた絵島の姿を胸に浮べてゐる

と、あの人はまだ若く盛りの年で、美しい縫模様の打掛けを羽織り大勢の奥女中を引き連れて人気ものの丹前役者と酒盛りしている様子はどんなに華やかだったろうと、そのことばかりがきらびやかな夢を織りなして、かたい木綿夜着にくるまつたお汲の若い心をときめかせた。

その晩、偶然叔父や叔母と話しあつた絵島の囲い屋敷に、お汲が付き女中として行くことになったのは半月ばかりあとのことであつた。

絵島にそれまで従つてゐた女中が嫁入りすることになつたので、お汲を替りに出してはどうかという話が、内藤家の奥に勤めてゐる桜戸という奥女中から来た。桜戸は四郎五郎の従妹でお部屋様付きの老女であるが、主人のお綾の方が絵島の同情者なので、付き女中の口入れや絵島の衣類手廻りなどの世話は長年桜戸が内々に差配してゐるのである。

絵島は行儀正しく、浮いた風は微塵も見えぬ人柄で、尼僧のような生活をつづけているのだから、お汲のような娘が武士の妻になる前に奉公するには、なまじい家老の家などよりもよい仕つけが身につくと桜戸は力説した。

「さてどうしたものかな。桜戸どののいうのはその通りに違いあるまいが、何しろ表向きは科人だからなあ」

と四郎五郎は腕を組んで思案するし、幾野も何となく嫁入り前の姪を配流の女の奉公人にすることは望ましくない様子だったが、お汲にその話をする、断るかと思つた案に相違

して、

「私は御奉公に行きます。あのお方なら御主人として仕えられると思います」

「と思い込んでいうので、どうやら話がききました。蓮華寺の日成和尚も絵島に宛てた手紙を書いてくれた。」

その日は細かい雨が道を濡らして、お城のある高見は濛々と霧けむっていた。

搦め手御門から武家屋敷のうちつづく坂道を降りて、山畑の妻が霧を含んで濡れているあたりを通りぬけて行くと、細い川が帯のように流れている平地に、板塀が見え、上に忍び返しのうってあるのがものものしく眺められた。

「あれが絵島どののお囲い屋敷です。上は大公儀への御遠慮で、飾りなど一切はぶいてあるけれども、お部屋様のお肝入りで、内にはお茶事や生花などなされるように用意してあるのですよ」

桜戸は簀り骨の扇を上げて、お汲にさし示した。本式の奉公とも違うのでわざと四郎五郎は付いて来ず、桜戸一人がお汲を案内して来たのである。

家の前まで来ると、湧き出すように蛙の音が前の小川から聞えて来た。桜戸は番所へ通って番の役人にお汲を連れて来た用向きを言った。

「仔細ござらぬ。お通り下さるようにな……」

日頃お綾の方から心付けられている役人は快く挨拶した。嫁入りで暇を取るといっておしんという女中が出て来て、折り目正しく挨拶してさきへ立ってゆく。内庭の手洗鉢の横にうす紅色の蝶が群れているような花の低く咲きこぼれているのが、美しくお汲の眼に映った。縁をめぐったところで、おしんは膝をついて、

「お奥の桜戸さまがお出でになりました」と言った。

「どうぞ、お通り下さるようにな……」

と内から答えるのは、正しく先日蓮華寺できいた絵島の張りのある声音である。

おしんが開いた障子から桜戸はお汲を連れて内へ入った。客座を除けて、鼠っぽい無地の着物に幅の狭い帯をしめた絵島が坐っていた。

「雨が降りますのに、わざわざ御大儀でございました。お部屋さまはごきげんよくいられますか」

絵島はそんな挨拶のあと、先日お綾の方から届けられた宇治の銘茶の味のよかった礼を言った。

「おしんの代りの女中をお連れ下されたそうで、この娘さんでございますか」

と絵島は言いながら、臉に瘦せの見える涼しい瞳で桜戸のうしろにうずくまっているお汲を凝つと見た。

「おお、この娘さんは見覚えがある。先月蓮華寺へ御参詣し